

中世に於ける一自由衆団の禪

— 遠山の一派 —

古 田 紹 欽

中世の禪に所謂る遠山の一派があり、その法門は盛大を極めた。遠山の一派とは南浦紹明の法嗣、峯翁祖一の門派をいう。峯翁は筑州横嶽山崇福寺に迎えられて住したが、濃州遠山の明覚山大円寺の開祖となり、ついで尾州長嶋山妙興寺にも住した。大円寺には多くの参徒が会を望んで集ったと云われ、世に遠山と呼ばば峯翁のことを指す。この峯翁の嫡嗣に予州風早に宗昌寺を創めた大虫宗岑があるが、この大虫に嗣法したものに月菴宗光があり、遠山の一派はこの月菴に至って一大法門をなした。遠山の名は峯翁によって起ったが、所謂る遠山の一派が称せられたのは、月菴に於てである。

月菴は峯翁に大円寺に就いて十五才で祝髪受具し、青年期の修行をこの師の下に積んだが、師の示寂に遭い、諸方に歴参した後、宗昌寺大虫に随つてその法を嗣いだ。

この峯翁、大虫に関して知る資料は惜しい哉極めて乏しく、峯翁には『正宗大暁禪峯翁語録』の一巻が写本とし

僅に伝るのみであり、大虫には殆んどその資料らしいものの遺るものがなく、初期の遠山の禪を詳かにすることはむづかしいが、月菴の禪を知るには幸に『月菴和尚語録』二巻と、『月菴仮名法語』一卷、それに伝としては『月菴和尚行実』とが存する。『語録』、『行実』は月菴の門人興樹の編したものであり、『仮名法語』もその側近の誰かの編にかかって資料としては信頼に足り、月菴によって盛大となった遠山の法門が、此等の諸資料によって凡そどのようなものであったかが知り得られる。

月菴の法孫は門人の興樹が応永十五年に歿して、その後数世代で嗣の絶えたことから月菴の存在は、禪宗教団史の上に殆んど注目されることがなかったが、思想史の上から見ると、その占めた位置の大きいことに気付かされる。峯翁、大虫の諸資料が伝わらなかったのは、この一派が教団の一派として残らなかったために散逸してしまったことに因ろうが、その間に月菴の資料のみが遺ったのは、月菴の業績があまりにも大きかったに基こう。

月菴が禪文学者として傑出したことは、その『語録』、『仮名法語』を一見すれば知られるが、月菴の偉大であったことは単に学者であったことに止まらない。以下、月菴の業績についていささかこれを明にして見たい。

まず興樹の偏した『行実』に、五山文学の第一人者とも目すべき惟肖得敵が跋を寄せ、その冒頭に次のように云っている。

「黒川の月菴大禪師は化を駢めて既に廿余歳にして緇白欽仰す。児卒も誦し知ること猶し在日の如し、道德の人を感入すること、また深きこと此の如し」

と。この人は道德の人であったのであり、道俗に対して歿後までも感化力をもった程の人であったのである。

この月菴の伝を詳しく知るには『行実』があり、ここに敢えて必要以上にふれて述べることを避けるが、道俗に深く感化を与えた人であったことは、この人がまた教育者でもあったということであろう。事実その資性を具えた人であったのである。

『行実』は月菴の出生と、峯翁に師事して宗光と名づけられた所以を記して、母が京都にあったとき夢に手に宝蓋を持ち、高山の頂に踞っていたところ、朝日の光が身を朗かに照すのを見て妊娠したとし、峯翁がこの夢に因んで吾宗の光明盛大となることを願ひ、宗光の名を授けたと云っているが、月菴は資性に朝光を思はすような明朗なものがあつて、人柄に魅力的なものがあつたように思える。

又、『行実』は月菴の少年時代の人柄を評して「風姿爽拔にして目光人を射る」といってもいるが、この風姿は天赋のものとして晩年に至るまで変ることがなく、見るからに爽拔で人々の帰崇を厚くするものがあつたであろう。学者で教育者で、資性に恵まれ、且つ道徳の人であつたということになれば、その感化が道俗の間に広く深く及んだことは不思議ではない。更に『行実』を見るとこう述べている。

「師踐履穩密にして法量淵沖なり、既に大空自在三昧を得て臨済の吹毛を用ひ、虎丘の省数を使ふこと凡そ廿余年、彼の来機に赴くこと千問万難、一割を消せず、鐘の扣くに随つて無心にして応ずるが如し、況んや峻機妙用、点化時に臨むこと、譬へば醫の靈方を用いて邪を抜き、毒を改めて痛快脱洒にして、立つに神効を見るが如し、但だ是れ一生孤硬にして容易に人を許可せず、毎に謂つて曰く、一人半人を得ざるとき人ば己なん、仮使ひ吾が家の種草地を掃ふに至るとも、肯て先宗を辱めて纖瑕を生ぜしむ可からず、而も況んや斯の道日を

逐ふて跡名言に渉る、英靈出格の土に非ざるよりは、安んぞ能く元氣を濁末に回し、狂瀾を玄源に止めんや」と。

月菴は行持穩密、身を持すること重厚で、容易には人を許可しないものがあつたが、内に法量を豊かに貯えと共に、それを外に現わしては「峻機妙用」、教化を自在にしたのであり、教育者としての力量の人であつたであらう。また「一生孤硬」であつたというが、このことは妥協しなかつたということであり、信念の人であつたであらう。

なを「時に臨むこと、譬へば医の靈方を用つて邪を抜き毒を攻めて、痛快脱洒して立つに神効を見るが如し」とあるように、月菴は教化に當つて時に臨むことに鋭敏であつたのであり、教化の対象をこの人くらい随時に適確に擲んだ人はなかつたであらう。月菴の禅は人柄としても目光の人を射るものがあり、峻厳であつたことは想像されるが、教化の対象に應じて、これを平易にしかも親しみ易く伝え説いたのであり、この点、教化の技術を充分に心得た人でもあつたであらう。それに学者であつた月菴は表現のすぐれた能力を持っていたのであり、この人くらい教化のための文章を巧にした人は稀しい。『行実』に月菴は「言句は小伎なり、苟くも其の関を透らざるときんば、自在を得ず、余、昔片言隻句と雖も千鈞百鎗を経ざれば、未だ敢て紙墨に形はさず」といっているように、言句文字のもつ意味を誤り無く、有効に用いた人は、また稀しい。

要するに月菴は資性と能力と履践との上に、身に持すべきものを蔽に持し、説き得るものの可能性を最大に發揮して、教化の成果をあげた人であつたと云わねばならない。

「踐履穩密」で思い起すことは、月菴は京都や鎌倉に出て大刹に住し、身の榮達を望むということを全くしなかつたことであり、この点、月菴は欲して教団の外にあつたのである。大虫の開いた宗昌寺に住し、但州黒川に雲頂

山大明寺を自ら開いて住し、同州の円通寺とか摂州の禪昌寺を開きもしたが、生涯の後半生の大部分を大明寺に過して、政治の中心地に出るということとはなかった。このことは元の中峯明本の隠逸的な禪風を慕ったものであろうが、性来世俗の名利を好まなかったのであり、従つてその禪風は高潔そのものであった。教化活動の上に積極的に世俗への接近を計りはしたが、世俗に墮することがなかった。「平日の提(唱)は直截縦横にして、利劔の匣を離るるが如く、明珠の盤を走るに似たり」(行実)と云われていて、提唱は直截であり、利劔の如き鋭さがあり、明珠の走るような円転さがあつたであろう。

月菴の道声が天下に知られるようになったのは、貞治六年秋に南紀伊、京洛の間に数年跡を混じた後に、山陰を経て黒川に入り、十二、三年を経て大明寺が成り、この寺にあつて教化を旺んにしてからであるが、その教化活動の旺んであつたことは、遂には大明寺僧堂の新建にまで発展した。月菴が黒川に入つた目的は柴棚を床とし、楮皮を被とする冷淡枯寂な生活を楽しむことであつたが、半載も経ない間に参徒が雲集する仕末となつた。

月菴の会下は忽ち一衆団をなすに至つたのであるが、月菴は道俗を一つにした新たな衆団の設立を計つた。それは諸方の叢林が出家衆団であつたのに対して、この衆団は在俗者にも解放された云わば自由衆団であつたのであり、従来衆団と著しく性格を異にしたものであつたであらう。

月菴が黒川の幽邃の地に籠つたのは、このような地を愛したことによつたことはもとよりであるが、このような衆団であつただけに、鎌倉や京都の叢林からの何等の干渉の出来るだけ及ばない山間の天地を選んだことであつたことも疑いない。

それでは月菴がこの衆団を卒いてどのような禪を説いたかである。異色の衆団であっただけに、その主張に従来的な禪に対して異ったものがあつたことは当然である。

月菴が当時の伝統的な禪に対して批判的であつたことは、『語録』や『仮名法語』のなかに見られるところであり、例えば『語録』の「示衆」の偈に「参禅は須らく心頭を放つて歇せしむべし、心頭を歇得すれば自ら禪を悟る。多く諸方行脚の士を見るに、東西に地を掘つて青天を覓む」と云い、同じく「示衆」の偈に「山中一味に辛苦を喫す、珍重す諸方五味の禪、怪む莫れ自ら脱身の計無きことを、何ぞ曾つて疥狗生天を願はん」と云つて、諸方の行脚の士、諸方の五味の禪を非難している。また『仮名法語』に

「古人やむことをえず、まげて方便をたれて坐禅参学、工夫用心をすすむ、坐禅参学工夫用心又別の道理なし、只直に見、直に行ずるところなり、初心の人は是をしらず、坐禅工夫の様を知識に参じてそのをしへのごとく用心して、得法悟道すべき様におもひをなして、ややもすれば死模様を尋ていかなる公案にても、我にしめしたまへと云、近代此風もつともさかんなり、もしかくのごとくして、仏法をあきらめんとおもはば、大に棒をあげて日をうたんとするに似たり、いづれの日、いづれの時か打あてん、又空中に梯しきを布て天にのぼらんとするごとし、いづれの劫にかのぼり得べき」(『示宗真居士』)

と云つていて、近代のこのような風を非難している。

ここに公案の問題にふれているが、月菴は同じく「示衆」の偈に「終朝に几几として疑団を守る、識らず幾時か心安んずることを得ん、参じて未だ徹せず看て未だ破れず、無量億劫大難難」と云い、「示坐禅僧」の偈に「箬意

忘懷俱に好からず、單單に話を看るも也た落草、此の外に甚の做工夫をか討ん、慈明老漢屋倒ると叫ぶ」と云い、
「示禪者」の偈に「父母所生の癡肉団、本来の面目自から完全、恁麼に信取して恁麼に看よ、外に向って何ぞ須
ん別に禪を覓むることを」と云っていて、月菴は必ずしも公案を斥けはしなかったものの、当時の公案禪を斥け
ている。

月菴が参徒を導くに、暫々問答を用いたであろうことは、『語録』のなかに「問答」が可成り多く収められている
ことによって想像されるが、その問答にしても、「示衆」の偈に「一問一答は問答に非ず、一挨一拶は挨拶に非ず、
放身捨命正に此の時、切に忌む胡棒乱喝とを」と云っていて、当時叢林で行われていたような問答と、異った意味
に於いて用いていたのであり、胡棒胡喝はこれまた取らなかった。

月菴が参徒に坐禅儀による坐法を教えたであろうことは、『仮名法語』の「示信女慶明」のなかに

「しづかなる所に生して先香^{きし}をたき、仏を三度拝し、其後手をくみ足を組生^{くみ}すべし、手の組やうは先右の手を
あふむけ下におきて、左の手をあふむけて上に重ねて、両方の大指のかしらをさしあはすべし、足は左の足を
右の足の上にかさぬべし、目は半許あけて口をばふさぎて、齒をくひ合せて舌をば上の脛に付て、おく齒をよ
くくひ結て背をすぐに立て、心をつよくもちて先にしめしたるごとく、我もいまだうまれぬさきの心はいかな
る物ぞと、念々うたがひきはめて見るべし、かやうに坐しても臥しても万事をなすときも、わすれず用心する
を工夫といふ、かくのごとく坐禅工夫しておこたりなきを、心もよくふるまふ人といふなり」

と云っていることによって知られるが、しかし兀兀地に生ずることもって、絶体とはしなかった。かつて月菴が

参じたことのある竺_二憍梵憍_一が南禅寺に住し、竺_二憍_一の偈に和韻した一偈の一句に、「坐禅経行総に是れ禅」（語録偈頌）とよんでいることにもそれが窺われるが、『語録』の「問答」に「師有る時衆に問ふて云く、諸人日夜兀兀地に坐す、箇の甚んの事をか究取せんと要する、衆各の下語す、師皆肯ぜずして自ら代つて云く、和尚に秦時の鏡を打破せられたる」と見えていることによって知られる。

月菴はつまり坐禅は坐法に従つて行われなくてはならないが、それは形式ではないとしたのである。坐禅工夫とは

「そもそも仏法を頓に明らめんとおもはば、只一切おこる所の心念、よろづの行跡是皆仏なり、如此直にしめせども猶疑あつておもひへだつる心あらば、先一切の心念をやめて、何ともかもしらざる所にむかつて坐禅工夫すべし」（法語「示明貞道人」）

ということであるとし、

「仏と衆生と更に別体なし、もし人かくのごとく当下に開悟すれば、一念の工夫をからず初心即正覺の仏也、さらに何ぞ坐禅修行をか勞せん」

ということであるとしている。一切の心念、行跡が皆仏であると頓悟し、仏と衆生とは別体ではないと当下に開悟出来たら、坐禅修行の必要はないとしている。

月菴の禅は一口に云えば、「直」、「當下」、「直下」と云っている禅であり、『語録』、『仮名法語』の随処に、繰返し繰返し「直」ということを強調している。

例えば、『語録』の法語に

「此事は青天白日の纖毫の障翳無きが如し、見る底は直に見て眸を回すことを勞せず、知る底は直に知る、豈に念を生ずるを容れんや、所以に三世の諸仏歷代の祖師は心を以て心を伝ふ、法を以て法に印して一機に脱出するは是れなり、時は末運に及んで法も亦澆漓す、其の師たる者の智眼明かならず、学者も亦信心不實にして是を以て直に接し直に示し直に參じ直に悟ること能はず、動もすれば是れ模を起し様を書き、門に依り戸に傍つて彼此草裏に輾入して、正路を失却する者、稻麻竹葦の如し、勝けて數ふ可からず、實に憐愍す可き者也」
（『示存仙禪者』）

と見えてをり、『仮名法語』に

「……この心なしといふは、是は是にして是の道理なし、非は非にして非の道理なし、生は生にして生の道理なし、死は死にして死の道理なし、乃至一切の念、其ものに即して物に即する道理なし、只直に見直に聞てさらふにふたたび頭をめぐらさず、即汝が本来面目現成の時節なり」（『示存上人』）と見えている。

この「直」の禪は悟りにあつては「さとりを待心にへだてられ」（法語「答在家人」）ないことであり、月菴は待悟禪を排したのである。月菴は一僧に如何なるか是れ道と問はれたが、黙然として對へることがなく、偈を以て示して、「日日我に就て道を問ひ禪に參ず、別に方便無し端生默然」（語録、「頌古の中に垂示を含むもの」と云っているが、その「直」の禪は、只管打坐の禪に一面近いものがあつたかも知れない。

では一体、自由衆団と考えられた月菴の会下にはどのような人達が集っていたのであろうか。『語録』を披いて奇異に感ずることは道号とその偈が甚だ多いことであり、道号を受け得た程の者は一応悟道に達した人々であつたろうと見る時、その衆団は多数の法材を打出していたと判断される。しかもそのなかには在俗者が含まれていたことであり、就中、女性が含まれていたことである。この在俗者は可成りの数に達しているものであり、このようなことは当時の叢林にあっては稀有のことであつたであらう。月菴の会下は女性に解放されていたのであり、若しそのような衆団の規矩が明かにされ得るならば、極めて興味深い課題である。

大明寺に新僧堂が建ったことは、『語録』に「臘八開新僧堂」の示衆のあるところから知られ、恐らく僧堂に女性の参禅を許していたものと想像される。でなかったら後に挙げるような大師が現われた筈はない。『語録』に正旦示衆、元宵示衆、結夏示衆、解夏示衆、冬至示衆、開爐示衆、端午示衆その他の示衆が載っていることからすると、叢林の規矩が行われていたことは知られるが、在俗者、殊に女性がどのようなかたちでこれに参加していたかは、現存の『語録』からでは詳かに出来ない。ただ一つ注意されることは、月菴が一日堂中に在って大衆に向い、坐中誰か主と作るかを問うて大衆に下語を求めたことがあり、月菴はその下語をすべて肯はず、一偈を示して「坐中誰か主と作る、切に忌む重ねて回顧することを、鼻孔向下に垂る、燈籠露柱に対す」（語録、頌古に含まれている）と述べていることであり、自由衆団であつたと見られるように、役位は別として堂中に特定の主を置かなかつたということである。主たる者は堂中の各々がそれではなくてはならぬというのであろう。推測するにその衆団は組織によるものではなく、参禅弁道はすべて各々の自主的な責任によるものとされたのである。堂中に於ける男女間の問題も、各自の自

主的な責任によって解決されていたのではなからうか。『語録』には道号を受けたもの二百四十八人を挙げているが、うち大師(姉)一人、禪門五人、居士十三人、道人五人、外にはっきりしない者一人を含めて、すべて在俗者であつたと見られるし、『語録』の「法語」、「仏事」、「賛語」、「自賛」、「頌古」、「偈頌」には、大師のためにしたものが最も多く存し、此等の女性はいづれも上記二百四十八人とは別に既に道号を得ていて、在俗者のなかでも女性の占める割合ひは少ないものではなかった。尼侍者、禪尼を併せるとその数の割合はい層高いものとなる。

試みに区分して挙げれば、「法語」に「示_レ雲大師_ニ」、「示_レ慶睦大師行脚_ニ」、「示_レ正心大師_ニ」、「示_レ如鏡大師_ニ」、「示_レ慶悟大師_ニ」(語録巻下)があり、「仏事」に「為_レ先妣宗欣大師拈香_ニ」、「為_レ慧俊大師下火_ニ」、「為_レ慶細大師下火_ニ」、「為_レ宗理大師秉炬_ニ」、「為_レ祥如大師下火_ニ」、「為_レ宗謹大師下火_ニ」、「為_レ慶嚴大師秉炬_ニ」、「為_レ法真大師秉炬_ニ」があり、「賛語」に「慶悟大師請」、「慶忻大師請」、「宗清大師請」、「宗祐大師請」、「玄永大師請」、「法意大師請」、「宗珠大師請」、「正心大師請」、「明久大師請」、「実相菴主明等大師請」、「正有大師請」、「師与_レ大証禪師相見像妙準大師請」、「契宗大師請」、「慶睦大師請」、「宗仙大師請」、「妙皓大師請」、「法喜大師請」、「祖三大師請」、「永昌大師請」、「慶賀大師請」、「正門大師請」、「慶安大師請」、「宗真大師請」があり、「頌古」に「明等大師請益即心即仏因縁_ヲ因示_レ之云_ニ」があり、「偈頌」に「香大師請問_ク做工夫事作_ク偈示_レ之_ニ」、「悼_ク慧空大師示_レ其子保先上人_ニ」がある。月菴が自からの画像に自賛したもの五十七偈のうち、大師のためにしたもの二十一偈に及んでいる。

このうちには、実相菴主明等大師のように劉鉄磨にも比せられる比丘尼もいたし、宗貞のように藏主となっていた比丘尼もいて、会中にあつて指導的位置にあつたろうものもいた。尼の修行ぶりも大明寺にあつての元宵示衆の際、

月菴が○相を呈示したところ、一尼が来って下語したことが見えてをり、『語録』の「問答」には「尼有って参じて云く、了了の時に了す可き無し、師云く、如何是轉身の処、〔尼〕便ち喝す、師云く、跳れとも出でず、〔尼〕又喝す、師云く、果然」という問答、また「尼問ふ、從上の諸聖何の処に向ってか行履する、師云く、汝が何処に向ってか行履する、云く、和尚に弁じ了らる、師云く、何処にか山僧を見る、尼微笑す、師云く、箇の錢老尼」といった問答、或は「師宗玄大師に問うて云く、上人の性は甚麼の処にか在る、云く、問有れば答有り、師云く、問無く答無き時は如何、玄、低頭叉手、師云く、渠は是れ阿誰ぞ、玄便ち喝す、師便ち打ち」といった問答が見えていて、尼のうちには實際に室内に参じていたものがあったことが知られる。『語録』の「法語」に「比丘尼宗呈侍者に示す」として、月菴は次のように云っているが、この比丘尼侍者の如きは久参の人であつたに違いなく、新到僧などは、この侍者の脇にも近づくことが出来なかつたのではなからうか。

「十方坐断すれば千眼頓に開く、一句截流万機寢削す、三世の諸仏舌を結ぶに分有り、歴代の祖師も全提し起さず、尽大地の人更に何処に向ってか安泊せん、所以に僧趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西来意、答は問処に在り、州云く、庭前の柏樹子、現成公案、僧云く、和尚境をもつて人に示す莫れ、狂狗は塊を逐ふ、州云く、我は境をもつて人に示さず、獅子人を咬む、僧云く、如何なるか是れ祖師西来意、再犯を容さず、州云く、庭前の柏樹子、機は位を離れず、僧即ち大悟、果然毒海に墮在す、你這裏に到つて如何か信取し、如何か参究せん、還つて曾すや、若し猶根思遅回ならば行住生臥、把つて一件と做して擬議を容れず、急急に眼を著けて是れ什麼ぞと看よ、此の如く看来り究め去らば、伎倆尽ん時必らず轉身の分有らん、勉旃」

と。

先きに大明寺に新僧堂が成ったことを云ったが、新僧堂の「新」は初めて新たに建ったというのか、旧僧堂に対して新といったものかはっきりしないが、上述のように在俗者の参徒が多かったこと、又その女性が多かったことを思うと、いずれにせよ僧堂は当然必要であつたであろう。『仮名法語』を見ると在家人に示し、或は答えたもの、在家人に示したもの、信女に示したものが載っており、参徒とまでは称し得難い一般在家人までが集つて来たとすると、そうした人達を收容するための設備もまた無くてはならなかつたであろう。

居士の参禅者としては、早くから山名一族があり、師義、時義、時熙の太守は深く帰依していて、殊に時熙は修禅につとめ、宗源居士の号、巨川の道号を受けた程の人である。月菴の『語録』、『行実』が応永に刊行になつたのも、又月菴に正統大祖禅師の禅師号追謚を奏して授かつたのも、この居士の力によるものである。惟肖は居士をもつて兜率従悦の得法の弟子張無尽居士に比している。月菴晩年の参徒であつたらしく「示宗源居士」の長文の法語の末尾に「右、巨川源公居士、紙を出して再三に語を需む、老拙沈痾困すること甚し、思索するに力無し、然も其の志懇誠なるを以て謙辞すること能はず、疾を力めて先達入道の因縁を縷書して、以て警策と為るのみ、更に一点の仏法の公に示す無し、如何、如何」と記している。先達入道の因縁とは龐居士等の英傑の士を列挙し、「余今畧前段の因縁を挙して以て後來の張本と為す。望むらくは公、顔を希ひ、蘭を慕ひ、賢を見、聖を思つて先哲の高躅を追攀して、今時の途轍に墮せざれ、直に須らく大誓願を發し、猛烈の志を奮つて十二時中、行住坐臥、一切所作所為の事の上に向つて、答筈に撃石火閃電光の機を具して、急急に眼を筈けて是れ甚麼ぞと看るべし……」と述べて

いること指すが、この法語に見るように、宗源居士が達道の士であったことを偲ばせる。大守がこのような人であったことから、引いては山名氏一門を初め、その将士の月菴に帰崇する者があったことは云うまでもなからう。

月菴の会下はまことに多彩を極め、出家人あり在家人あり、男あり女あり、太守あり庶民ありであったが、その間に特定の差別はなかったように思われる。民主的運営にされた自由衆団であったであろう。「三世の諸仏只此の如し、歴代の祖師も亦此の如し、蠢動含靈及び山河、都て毫髪も差異有ること無し」（語録「示衆」）とよんでいるように、身分、地位、性別の差異を認めなかったのではなからうか。

月菴は教育者としては『仮名法語』によって、禅を出来るだけ平易に説くことにつとめ、そのすぐれた文章は読むものに深い感動を与えたが、その教育者であった真の所以は、禅を教団から解放し、自由衆団を樹立したことにあったと見られる。そしてその指導者としては指導に耐える豊かな知性と、高潔な道徳とを具えた資格者であったということである。かつて月菴が孤峯覚明に雲州雲樹寺に至って参じた時、孤峯は「我れ三十年、人の為めにし未だ此の機に遇はず、他日遠山の一派は当に斯の人に属すべし」（行実）といったことが、月菴が現われなかったらこの一派の盛大はなかったし、このような自由衆団の成立を見ることもなかったであろう。

月菴が「立秋」と題してよんでいる一偈に「一葉飄然として天下驚く、現成公案自ら分明、山中一百余の禅衲、那箇か今朝眼晴を開く」（語録、「偈頌」）とあるが、一葉飄然とは、黒川に於ける月菴自身のことを山中の落葉に托して云っている如くであり、現成公案は自由衆団の現実を云っているものと解され、黒川の山間に一百余衲が参集していたことは、確かに天下の驚異であったに違いない。

何時の時代にあってもそうであろうが、多衆の勢いは驚異ならぬ脅威であり、月菴会下が多衆を擁していたことは、当時の天下の叢林の脅威であったであろう。

一般に門派という時は嗣法の上に於て云われることであろうが、遠山の一派は峯翁の法系を指したにとどまらず、その派は多衆の勢力であったのであり、その勢力は強大なものであったのである。

康応元年三月二十三日、月菴が大明寺に六十四才をもって歿し、月菴を中心とした自由衆団は分散すべくして分散したが、この一派の意味したものは、禅思想史の上に見落されてはならない。

因みに月菴の禅が盤珪禅に与えたであろう影響は、少くないが、このことについては別稿で述べよう。